

# news

THE MUSEUM OF MODERN ART, WAKAYAMA

2016 085



村井正誠《パンチュール No.3》 1929(昭和4)～1934(昭和9) 油彩、キャンバス

## 「生誕110年 村井正誠展——ひとの居る場所」のために

和歌山県立近代美術館では、12月18日から年を越して2月14日まで、「生誕110年 村井正誠展 ひとの居る場所」を開催しました。村井正誠は1905(明治38)年に岐阜県大垣市に生まれ、小学生の頃から和歌山県の南部にある街、新宮で育った画家です。戦前からの抽象絵画の作家として高く評価されています。

その一方で、東京国際版画ビエンナーレなどの国際版画展でも活躍し、第3回展では文部大臣賞を受賞した版画家でもあること、鬚嘔が《足跡》を発表した1964(昭和39)年の第4回展以降、この展覧会でシルクスクリーンの作例が増える以前から孔版作品を制作しており、1956(昭和31)年にニューヨークで開かれた第17回ナショナル・セリグラフ協会に出品していたことなどはあまり知られていないかもしれません。



《風》1962(昭和37)石版、紙  
第3回東京国際版画ビエンナーレ展 文部大臣賞受賞

村井の版画には、表現の魅力とともに、木版、銅版、石版、孔版という手がけた版種の多様性、そして大正時代の「自画自刻自摺」の創作版画から、現代の製版・印刷を手がける工房との共同制作へ、という日本の近代版画史そのもののような制作の歴史に注目すべき側面があります。今回の展覧会では、油彩画に併せて版画を展示することで、画家にして版画家——「パントゥル・グラヴール」であっ

た村井正誠の仕事をご紹介します。

村井がはじめて版画を手がけたのは、1925(大正14)年に文化学院大学部美術科に入学し、同人誌『LE CHER PEINTRE』を創刊した時でした。村井はここで表紙や挿画として数々の木版画を制作しています。文化学院では創作版画運動の始まりである『方寸』を創刊した石井柏亭、美しい版画口絵で知られる『明星』を発行した与謝野寛・晶子夫妻が教えており、村井が版画に親しむきっかけを得るために十分な環境でした。

文化学院卒業後、1928(昭和3)年にパリへ渡った村井は、エコール・ド・パリに代表される華やかなパリ画壇の流行には追随せず、原始・中世美術の素朴で強靱な表現に共感し、モンドリアンらの抽象美術に刺激を受けながら、時代と国境を越えて人の心に響く、普遍的な表現を求めて本格的な制作を始めました。

日本抽象絵画の先駆けとなったそれらの作品は、第二次世界大戦へと向かう不穏な世情のもとでも変わらない人間の生命の輝きを求め、提示しようとするものでした。その一方で、村井はこのパリ滞在中にも木版画用の刀を携え、マティスの石版画を集めるなど、版画への関心を失っていませんでした。

1932(昭和7)年、パリから帰った村井は、1934(昭和9)年に銀座・紀伊國屋ギャラ

リーで初めての個展を開き、続いて美術団体から離れて友人の山口薫、矢橋六郎、長谷川三郎らと「新時代洋画展」を創立しました。新時代洋画展は、ほぼ毎月、銀座の紀伊國屋ギャラリーで展覧会を開いて、年に一度、上野の東京府美術館で大規模な展覧会を開く団体展のありかたより、人々の生活圏に近い場所で、その生活空間に似通った大きさの画廊で作品発表をすることで、生活のレベルで絵画と人との密接な関係を結ぼうとしました。

その試みの一つが素描などを中心にした紙作品の展示も行うことです。この試みは「良心的な作品を示して一般に鑑賞して貰ふといふ目的から、一步を進めて、自分達の作品を最も安価に大衆の中に」もたらす、「最も時代に即した展覧の形式」と美術雑誌の展覧評でも評価されています(尾川多計「新時代洋画展」『アトリエ』11-9、1934年9月)。このころ、村井は版画の制作に力を入れていて、母校の文化学院が開く「文化学院美術工芸展」にも木版画だけでなく銅版画を出品している記録があり、石版画の作例も残されています。銅版については、文化学院に早い時期から西田武雄のエッチング研究所が頒布していた国産の銅版画プレス機がありましたし、石版については『LE CHER PEINTRE』時代からの友人、田坂乾が優れた石版画家になっており、微妙



《ロンバルディア》1929(昭和4)油彩、キャンバス



《ボウトレ・アラブ》1936(昭和11)石版、紙  
村井正誠記念美術館蔵

な手技が求められる石版の製版や印刷も、田坂と制作を共にすれば可能だったでしょう。

この新時代洋画展の頃に、村井の版画は完成していきました。油彩画家であるだけでなく版画家として認められていたことは、戦時中に「版画奉公会」の会員であったことでも推察できます。このことが、戦後、数々の国際版画展への出品につながっていきませんが、その実現には製版、印刷に携わった工房の存在が大きく関わっています。戦後の村井の制作は、自画自刻自摺から、多くは切り紙による下絵を工房に渡し、製版と印刷を任せる方法になっていました。

その担い手の一人に、石版の名手だった女屋勘左衛門がいます。村井は1971(昭和46)年に女屋が東京版画研究所を創立するときに北川民次、岡鹿之助らとともに賛助しましたが、それ以前の1954(昭和29)年に出版された版画集『セルクル・ド・グラヴール・デュ・ジャポン』での共同作業以来、女屋の製版・印刷による石版はおおよそ50点にのぼります(『知られざる刷り師 女屋勘左衛門と日本のパントゥール・グラヴール』1998年、目黒区美術館)。また、シルクスクリーンの普及に力のあった植田理邦が、その技法書に制作例として紹介したのは村井の作品でした(『シルクスクリーン』美術出版社、1970年)。



《女の顔》 1956(昭和31)シルクスクリーン、紙

大正時代の創作版画の雰囲気にも馴染んでいた村井が製版と印刷を工房に任せることができたのは、パリで工房との共同作業で制作される版画に関心を抱いていたこと、自身の制作の中心が油彩画にあることを強く意識していたことが影響しているのでしょう。村井にとって版画は、油彩画を描くための実験の場でした。木版でも、一枚の版木を彫るばかりではなく、板に木ぎれを接着して版を作ってしまうなど、製版にも版画を専門に学んだ人とは違った大胆なところが見受け



同人誌『LE CHER PEINTRE』  
4 1926(大正15・昭和元)  
木版ほか(冊子) 個人蔵



『近代孔版』1951(昭和26)  
謄写版(冊子) 孔版技術研究所  
個人蔵

られます。

同時に、村井の明快な抽象表現が、製版、印刷の技術を持った人たちの心を引きつけた側面もあります。1951(昭和26)年に、東京国立博物館で開催されたマティス展では、版画集『サーカス』の明快なイメージに孔版の表現の可能性を見て、版画を制作した人たちが謄写版(ガリ版)技術者のなかにいましたが、その原画を村井が提供しています(『近代孔版』1951(昭和26)年、孔版技術研究所)。

自らすべての工程を手がけるタイプの版画家とは異なる闊達な制作に、画家と製版、印刷の技術者という何人もの「ひと」が居る場所を作っていくこともまた、村井の創造が目指すところであったことを展示によってお伝えできればと思います。(植野比佐見)



# 月みれば 日本画家・稗田一穂と月

## ～《帰り路》について



《夏去る》1980(昭和55) 顔料、紙

近年まれに見る巨大な月、スーパームーンが出現した昨年の秋。いつもと変わらない平凡な日常が終わろうとする時、ふと見上げた夜空に、煌々と照る巨大な異形の満月を見つけてギョッとした記憶はないだろうか。普段より存在感を増して迫り来る月に物思い、なにかこころに変化がおきなかっただろうか。

日常の風景に現れた月と人の心とが交錯する瞬間を描いた作品に、<sup>ひえだかずほ</sup>稗田一穂氏[1920(大正9)年～]の《帰り路》1981(昭和56)年がある。スーパームーンが話題となっていた頃、当館の「ここだけの日本画」展[2015(平成27)年9月11日～11月3日]の最後を飾っていた。

和歌山県田辺市出身の稗田氏は、敗戦によって混乱を極めた戦後の日本画界で、伝統的な花鳥風月に立脚して現代的な感覚を描き出し、95歳を迎えた現在も清新な輝きを放ち続けている作家である。

稗田氏は1980(昭和55)年代頃に花鳥風月の主題から離れ、「なまなましい人物像ではなくて、クールで冷たい絵」<sup>\*1</sup>に取り組みはじめた。その代表的な例ともいえる1980(昭和55)年の《夏去る》は、女性が海を背景に一人佇む姿を描いたもの。遠くを見据えるまなざし、一文字に結んだ口元などの表情は、微笑んでいるようにも、悲しんでいるようにも見えて、感情を読み取りにくい。一方で、その内面を映し出すかのように、<sup>たそがれ</sup>黄昏時の空や海の色、波のさざめき、風のそよぎなど、風景は多弁に語りかけてくる。

《帰り路》はその翌年の作である。こ

こに描かれた女性も、後ろ姿からは心情を読み取り難いが、それを代弁するかのように彼女をとりまく風景が画面に広がる。夕暮れ時、鬱蒼とした林を残す都会近郊のかげりゆく街並み、大きく蛇行する線路、澄んだ空の青に儂く溶けていく電車の架線——そこに現れた月。稗田氏は「傷ついて帰路につく人」<sup>\*1</sup>を描いたという。彼女が、なぜ、何に傷ついたのかは分からないが、現代人の孤独をとらえようとする普遍的な世界に、深く共感する人も少なくないだろう。2015(平成27)年の第42回創画展へ出品した《微風》でも、巨木を前に、愛犬とともに一人佇んで月を見る一人の女性の後ろ姿を、稗田氏は描いた。後ろ姿の彼女たちは、月に何を想うのか。

平安時代の歌人は「月みれば千々に物こそ悲しけれ我身ひとつの秋にはあらねど」(大江千里「百人一首」より)と、秋の夜長の感傷を詠じたが、月は必ずしも人をセンチメンタルにさせるばかりではない。江戸時代の狂歌師は「月みれば千々に芋こそ食いたけれ我身ひとつの好きにはあらねど」(大田南畝)とパロディ化して、味覚の秋らしい笑いに変えた。月へのま

一日が始る朝、白いベールを剥いていく様な夜明けも美しいが、多くの感情の起伏を経た一日が終わろうとする夕刻の、空や風景が語りかけてくれる表情は複雑で悲しげで美しい。

通い見馴れたいつもの帰り路に、突然予想外に大きなそして不気味な程に赤味を帯びた丸い月を見た時の驚きは宇宙の演出の不思議さを感じる。月は或る時は球よりもまだ丸く見え、或は冷く、暖く、時には走る。空は月よりもまだ手前に眼前に音もなく迫って来るとすら思える時もある。

都会に住む私は日中殆ど空を見ていない様だ、昼の空は語ってくれる事が少なく単調である。

高原等で見る碧い絨毯の様な高い空、手が届きそうでいて奥深くきらめく無数の星を抱えた大空の限りない神秘さにも心を動かされるが、今の私は宵の空が最も心にし

なぎしは時代と環境、人によって大きく異なる。

現代ではどうか。傷ついた心を《帰り路》に塗り込めた画家は、広大深遠なる宇宙への畏怖を思い、次のように語る。

月に人間が足跡を残した歴史的な事実を知っていても、この重い月が宇宙に浮かび、軌道を巡っていることが不思議であり、あの赫々たる太陽の光線を反射して、かくも青白く冴え冴えと照り返る月面もまた更に信じられぬ神秘に包まれた謎である。限りの無い宇宙の暗い大空間はどのようなものであろう。私には想像外の恐怖や畏敬すらも覚える。<sup>\*2</sup>

洗練されながらも何処か孤独や寂寥感が漂うこの絵の世界は、センチメンタルな「月みれば…」の叙情の系譜を連想させつつ、それとは異なる宇宙論にまで突き抜けた、現代人らしい感覚による新しいポエジーかもしれない。(藤本真名美)

<sup>\*1</sup>「秋・制作ざんまい、稗田一穂」『サンケイ新聞』1983(昭和58)年10月13日夕刊

<sup>\*2</sup>「未来へ続く不変の悠久——『天宇』」『紀伊民報』1990(平成2)年1月1日

みる。複雑な思いを込めた澄み切った空を描きたい。

稗田一穂「暮色」『アトリエ』669号  
1982(昭和57)年11月



《帰り路》1981(昭和56) 顔料、紙

## 「ここだけの日本画」展記念講演会 千住博氏 「日本画とは何か。恩師・稗田一穂先生から学んだこと」



2015(平成27)年10月25日、「ここだけの日本画」展の関連事業として、稗田氏に東京藝術大学で9年間学んだ千住博氏による記念講演会を開催しました。千住氏はスマートな話術と明解な切り口で、聴衆を日本画の世界へ

と誘ってくださいました。

日本画とは決して「日本」という枠組みの狭い意識によるものではない、と力強く語る千住氏。日本画の技法は、顔料となる鉱物や胡粉の原料となる貝殻などの自然物を画面に定着させるもの、すなわち古代から脈々と受け継がれてきた、「宇宙」と人間がつながろうとする原初的な表現であるとの考えを示されます。

我々が暮らす広大な宇宙。そこで展開する「奇跡」とも言える森羅万象に「驚いて感動しているのが稗田先生」と

千住氏は恩師について語り、古代の洞窟壁画から、琳派などの日本の古画、西洋近代の印象派絵画などにいたるまで、様々な作品を紹介・比較しながら、日本画の特質や稗田作品の特徴を解説してくださいました。いたずらな宗教性、装飾性、ドラマ性を排した、洗練された絵画こそが日本画の「着地点」であると先生は示された——そう締めくくった千住氏は、恩師の姿を振り返りながら、ご自身もまた創作への決意を新たにされているようでした。

(藤本真名美)

## ICOM-ITC 第5回研修会に参加して

### ミッション／ビジョン／リレーション と、その中にあるモノ



第5回研修会の講師、スタッフと参加者たち

ICOM(イコム)という名前は、日本ではまだあまり知られていないでしょうか。International Council of Museums(国際博物館会議)の略称で、戦後すぐの1946(昭和21)年に創設された国際的な非政府機関です。世界136の国と地域から、3万4千人以上の博物館に関わる専門家と2千以上の博物館施設が参加しています。当館や県内の博物館施設では、毎年ゴールデンウィークの時期にミュージアムウィークを開催していますが、それはICOMによって定められている5月18日の「国際博物館の日」<sup>1)</sup>にちなんでのことです。

このICOMの研修センター(ICOM-ITC: International Training Centre for Museum Studies)<sup>2)</sup>が、2013(平成25)年夏に北京の故宮博物院内に設立され、以来、春と秋の年2回、毎回テーマを変えて研修会が開かれています。これまではマネジメント、コレクション、教育、展示といった博物館の具体的な仕事テーマに揭げられていましたが、5回目となる今回は、The Engaging Museum(エンゲージング・

ミュージアム)という言葉が冠されました。

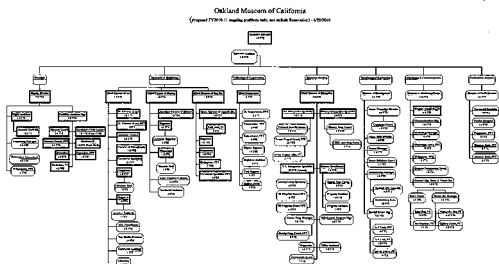
「engaging」は「魅力のある、人を引きつける」と訳されますが、一方でその元となる動詞「engage(エンゲージ)」には、「婚約する」や「物事が噛み合う」という意味があります。これは日本語には訳しにくく、しかしとても強いイメージがある言葉です。ミュージアムの活動においては、来館者や地域社会と「かかわり合いを持つ、結びつく」と訳せるでしょうか。筆者はまずこの言葉に、教育普及活動との直接的な関わりがあるのは確かながら、どこか理解しきれないひっかかりを感じ、けれどもミュージアムのあり方を、その態度として捉え直す言葉なのではないかという期待を抱きました。そして応募し、幸いにも参加する機会を得ることができました。

今回の研修会には、中国国内から15人、その他13カ国から15人、合計30人が選ばれました。もちろん初対面のメンバーですが、応募資格に「45歳以下の中級ポストにあるもの」とあるため、およそ同世代が集まりました。しかし各自が勤めるミュージアムの種類は、美術館だけでなく、科学系から考古系、歴史系、陶磁器専門などさまざまで、また役職も学芸員、展示プラン担当者や広報に携わる人まで、幅広いものでした。そして館の規模も地域特性も文化的背景も経済的条件も全く異なるこのメンバーで9日間、「ミュージアムが“エンゲージング”であるとはどういうことなのか」という課題について

じっくり取り組むことになりました。

研修の大部分を占めたのは、イギリス、アメリカ、オランダから招かれた各専門の講師による、多様な事例紹介とグループディスカッションを合わせたワークショップです。リヴァプール国立博物館(NML: National Museums Liverpool)のコレクション部門を率いるシャロン・グランヴィル(Sharon Granville)氏は、「エンゲージメントのためのミュージアム再形成」と題したプログラムを準備されました。その冒頭でシャロン氏は、ミュージアムを「社会を変えるための中心地」と位置づけ、そうなるための段階を、①開かれた組織となる ②新たな観客層にひびくアプローチをする ③社会を変える仲介者としてのミュージアムの三つと定めて話を始められました。そのために行うべき具体的な方法が、ミュージアムが示している「ミッション(使命)」を見直すことです。

今、世界中のミュージアムで、各館のミッションを書き換える動きが始まっています。多くのミッションは、「芸術の幅広い理解のために、作品を収集し、保存し、展示し、…」ということをそれぞれのコレクションの特性に応じてうたっていますが、紹介されたNMLの以前のミッションも、まさにこれと同じ形式をとっていました。それを新たに「開かれたミュージアムとしての、世界的な先進例となること」というたった一行、シンプルなミッションに書き換えたというのです。シャロン氏はこう言います。「以前のミッションに



OMCAの旧組織図(左)と新組織図(右)



は、もちろん一つも「間違い」はない。でも魅力的でもない」と。そしてシンプルなミッションは、そのミュージアムに関わるすべての人が、同じ方向を向くために必要なのだと。

二つめのワークショップは、アメリカ西海岸はサンフランシスコの近く、歴史、自然、美術という幅広い分野を抱えるオークランドミュージアム(OMCA: Oakland Museum of California)の普及部門ディレクター、リサ・ササキ(Lisa Sasaki)氏による「エンゲージメントプログラム形成の技術と科学」でした。このミュージアムもミッションを、「すべてのカリフォルニア人が、自分たちとコミュニティのために、より生き生きとした未来を作れるよう、刺激を与えること」と書き換えています。加えて興味深いのは、ミッションに加えてビジョン「OMCAが、繁栄したコミュニティと州全体を導く人の中核となる」をあわせて明記し、実施するプログラムすべてに共通する基本的な考え方で定めていることでした。

ビジョンとは、「将来の姿」つまり「どうなりたいか」を示したものです。そのビジョンに到達するために、今なすべきことがミッションだと言えるでしょう。さらにOMCAは、このビジョンに到達するため、従来の縦割りであった部門構成を徹底して改編します。花のかたちのように連なり、互いに業務が重なり合う新たな組織形態の図がスライドで示された瞬間、受講者全員から驚きとあこがれのため息が漏れました。

三つめは、新しいかたちの博物館や運営戦略を提案するCOMMiDEA(www.commidea.nl)を創設し、デジタル分野における博物館のコンサルタントとして活躍するテオ・メールボア(Theodorus Meerboer)氏が講師を務められました。「デジタルエンゲージメントの方法を組み立てる」と題されたケーススタディでは、新しいメディアを使ったミュージアムの取り組みが数多く紹介されました。しかしメールボア氏は、突き詰めれば、デジタルメディアは必ずしも使う必要はないと主張します。ウェブサイト、ブログ、App、

Facebook、Youtube……数多くのデジタルメディア、ソーシャルメディアが登場して、多くの館が使い始めているが、明確な目的と細かな戦略を持たずに始めたところは、すぐに関心を抱かれなくなっている。何より大切なのは、各館の有する財産や魅力をきちんと分析し、それを伝えるためにどのようなメディアを使うべきかを考えることのはずだと。また先の二人のワークショップから引き継がれたキーワード、ビジョン(将来の姿)とミッション(今なすべき使命)に、リレーション(生み出す関係性)を加えた三つの要素が三角形に配置され、互いに連鎖し合うロータリーエンジンの仕組みに例えられました。デジタルメディアの新たな活用だけでなく、展覧会という根本的なメディア自体も、その仕組みを動かす力の一つだと強調されていたことが印象的でした。

それぞれ別の講師によって準備されているながら、段階を経て考えを深められるように構成された三つのワークショップは、とても魅力的で皆に刺激を与えてくれました。その一方で、組織としてのあり方から見直すなど、一学芸員の手には負えないほど大きな視野で考えなければならなかったのも事実です。そして各自の現状を徹底的に見直すよう促され、少しパンクしかけていた私たちの頭をさらにかき回すように研修の最後に用意されていたのは、「リーディング・アーティファクト」、つまり「遺物解説」でした。これは故宮博物院の所蔵品を前に、何も情報を与えられないまま観察し、一体どんなものであったのかを想像して、教育プロ



「ビジョン/ミッション/リレーション」の三角形



グループワークを中心としたワークショップ



「リーディング・アーティファクト」で扱ったロバ形の水溜(上)と犬の衣装(下)

グラムを考えるとというものです。ロバのかたちの小さな銅製品や、少しおかしななかたちをした豪華な生地など、受講者の前には不思議なモノがいくつも並べられ、グループに分かれて互いに相談しながら答えを探してゆきます。全く訳のわからない、しかし確実に用途のあったものを前に細部を観察して、制作方法や時代、どんな人が使っていたのか、飾り物か儀式用か、普段使いのものかななどを、まるで探偵のように探る過程は何とも新鮮な体験でした。そしてこの手順が、まだ見ぬ来館者の鑑賞体験と同じであること、そしてミュージアムにはそんな魅力的な体験ができる「モノ」がたくさん溢れているという事実、そしてその「モノ」こそが、三角形の歯車の、中心軸にあたるのだと、改めて気づかされたのでした。博物館の仕事の根底を、じっくりと集中して考え直すこの9日間は、貴重な仲間との出会いとともに、これから取り組むさまざまな仕事への糧を、筆者に与えてくれたように思います。(青木加苗)

\*1 博物館の役割を広く人々に知ってもらう日として1977(昭和52)年に定められ、日本では2002(平成14)年から記念事業が行われています。

\*2 2010(平成22)年にICOM大会を上海で開催したことを記念して、2013(平成25)年7月、ICOM、ICOM中国、故宮博物院の三者が共同で設立。故宮博物院の宣伝教育部が事務局となり運営。第5回の研修は2015(平成27)年11月2日~10日。

写真: ICOM-ITC / スライド: 講師 提供

## 北山清太郎という人がいた



写真「自宅（兼日本洋画協会事務所）前の北山清太郎と家族」1913（大正2）年頃 個人蔵



北山清太郎編集兼発行『現代の洋画』2号、日本洋画協会、1912（明治45）当館蔵

近年における日本のアニメーション（以下、アニメと略）の発展は目覚ましいものがあります。表現の多様性と先進性は世界的な注目を集め、子どもから大人まで世界中に多くのファンがいます。ここまで大きく発展した日本のアニメですが、では日本において、いつだれが初めてそれを作ったのか、ご存知でしょうか。

日本人が作ったアニメが初めて公開されたのは、1917（大正6）年のことです。この年、<sup>しもかわおうえん</sup>下川凹天、<sup>きたやませいじろう</sup>北山清太郎、<sup>こううちじゅんいち</sup>幸内純一の3人が競争するように国産初のアニメを発表しました。この年を日本アニメの起源と考えれば、もうすぐその歴史は100年を迎えることになります。

この3人のひとりには和歌山県出身者がいました。1888（明治21）年、和歌山市

に生まれた北山清太郎がそうです。北山は日本活動写真株式会社（日活）に入社し、「猿蟹合戦」というアニメ作品を完成させ、1917大正6年5月に公開にこぎつけます。つまりは、日本におけるアニメの元祖のひとりには和歌山県出身であるのです。

実は、この北山、アニメの世界に飛び込む直前まで、美術の分野でも興味深く、重要な仕事を手がけていました。それは美術雑誌や展覧会カタログなどの出版事業を中心とした、大正時代初期の美術文化の興隆です。美術に関わる北山の事績を簡単に振り返ってみましょう。

1901（明治34）年に大下藤次郎が出版した水彩画の手引書、『水彩画之葉』<sup>すいさいがのしおり</sup>をきっかけに、明治30年代から若者たちを中心に水彩画ブームが起こります。北山もそれに巻き込まれたひとりでした。ただ、北山は自分で描くだけに留まらず、大下らが作った日本水彩画会に飛び込み、大阪に支部を作った後に上京、1911（明治44）年からは同会の機関誌である『みづゑ』の編集にも関わり始めます。

さらに自ら美術雑誌を立ち上げることを企図し、日本水彩画会を離れて「日本洋画協会」を興した上で、1912（明治45）年4月、雑誌『現代の洋画』を創刊します。1914（大正3）年の7月まで、合計29冊が発刊された同誌では、木村荘八などの執筆者を迎え、同時代の日本美術だけでなく、ヨーロッパを中心とした海外の美術動向が積極的に紹介されました。ゴッホなどのポスト印象派や、当時最新の動向

であった未来派、キュビズムの作品なども図版とともに紹介されています。

また雑誌の出版だけでなく、1912（大正元）年9月、先述の木村のほか、岸田劉生、高村光太郎、斎藤与里、萬鉄五郎、小林徳三郎、田中恭吉といった、当時まだまだ無名だった若い洋画家たちが集まったフェウザン会の結成にも関わり、その展覧会の開催やカタログの編集と出版を手がけています。画家たちへの献身的な支援によって北山は、無名だった印象派、ポスト印象派の画家たちを支えた、パリの画材屋兼画商のペール・タンギー（タンギー爺さん）になぞらえて、ペール・北山という呼称を与えられています。

和歌山の洋画家たちとも関わりがあり、1913（大正2）年の8月に、郷里で開催した絵画の講習会には川口軌外、林義明、和田伝太郎といった、当館でも作品を収蔵する作家たちが参加しています。川口などは、油絵を描いたのはこの講習会の機会が初めてだったようですが、東京で活躍する画家に教を請い、それぞれ画家への道が啓かれる大きなきっかけとなったようです。

北山とこの美術の関わりについては、開催中の「コレクション展 2015/16 - 冬」においてコーナーを設けて紹介しています。また、西洋美術の奔流を日本の美術家たちにぶつけ、新たな表現を生み出すきっかけを作ろうとした試みは、近く特別展でも紹介したいと準備しています。ご期待ください。（宮本久宣）



岸田劉生 《黒き帽子の自画像》1914（大正3）個人蔵



川口軌外 《風景》1918（大正7）当館蔵 \*裏に林義明への献辞

## 教育普及活動より 職場体験学習について

ここ数年、職場体験学習の受入を担当している。毎年15校ほどの学校から中学生、高校生が、一校につき2~3人ずつ、2日間あるいは3日間にわたって美術館の仕事を体験する。他の仕事も抱えつつの対応になるので、結構な負担にもなるのだが、団体での来館とは異なり、ダイレクトに生徒たちと接する貴重な機会でもある。美術館とは…といった話から、資料整理や文献調査、展示室の監視、受付など、時々に応じてさまざまなことを行う。生徒たち



にとってはバックヤードに入るのも初めての体験で、タイミングが合えば展示撤去作業なども見学する。この仕事により関心を持ってもらえたらよいなと思いつつながら対応しているが、どうだろうか。



ごく短期間なので体験できるのは美術館のほんの一部の仕事に過ぎない。けれども、同じ時間と空間を共有することで何か得て帰って欲しいと思いつつ日々過ごしている。(奥村一郎)

## Museum Calendar

開館/9時30分~17時00分(入場は16時30分まで)  
休館/毎週月曜日(祝休日の場合は開館、翌平日休館)

### 宇佐美圭司回顧展

2016.3.1(火)~4.17(日)

和歌山市で少年時代を過ごした宇佐美圭司(うさみ・けいじ、1940~2012)は、人体を記号化した絵画で注目を集めました。没後3年を機に、アトリエに残された遺作を中心に、その画業を一望します。



宇佐美圭司《山々は難破した船に似て No.2》  
2001(平成13) 個人蔵

12.23(水・祝)~2016.3.13(日)

コレクション展 2015/2016~冬  
特集 光について



前谷康太郎《Reconsider》  
2015(平成27) 作家蔵

2016.3.29(火)~5.29(日)

コレクション展 2016~春

特集 謄写印刷工房から  
~印刷と美術のはざままで



清水武次郎  
『蝸牛工房挨拶状』1946(昭和21)

## 平成27年度友の会美術鑑賞ツアー

毎年恒例となっている友の会美術鑑賞ツアー、今年は10月18日(日)に実施し、82名の参加がありました。早朝7時30分に大型バス2台で和歌山を出発し、開館に合わせて神戸市立博物館に到着。まずは、大英博が収集した古今東西の約700万点から選ばれた100点の「歴史の断片」を手がかりに人類の軌跡をたどるといふ特別展「大英博物館展

—100のモノが語る世界の歴史」を鑑賞しました。昼食後に訪れた須磨離宮公園では、緑豊かで広大な敷地と、山から海を眺める神戸らしい景色、そして時間をトリップしたような旧離宮の面影を楽しみ、最後はバラの花と香りに満たされる欧風噴水庭園で憩いのひとときを過ごしました。今回も楽しいバスツアーとなりました。(友の会 松原)



昭和初期の建築を転用した神戸市立博物館の外観

メールマガジン  
Facebook  
twitter  
ご案内

メールマガジンでは展覧会の情報はもちろん講演会、トーク、ワークショップなど当館に関連するタイムリーなトピックスを定期的にお届けしています。当館ホームページよりご登録いただけます。またFacebookやtwitterでも、最新の情報を発信しています。あわせてご利用ください。

TO  
THE  
MUSEUM

友の会 入会のご案内

一般会員 6,000円 学生会員 3,000円

ミュージアムショップにてお手続きいただけます。会員証即日発行。郵便振替でもお申し込みいただけます。

詳しくは友の会事務局まで。

Tel. 073-436-8690 担当: 松原

友の会 特典いろいろ

1. 展覧会の無料観覧(同伴者1名まで)
2. 展覧会レセプションへのご招待
3. 展覧会のご案内、美術館ニュース、その他情報の配布
4. 当館ミュージアムショップ、レストランでの割引
5. 各種行事への参加(美術鑑賞ツアー、ミュージアムコンサートなど)
6. 版画の頒布会への参加

